界

遥風 覇鵺渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

界

【Ｎコード】

Ｎ６２０３Ｅ

【作者名】

遥風　覇鵺渡

【あらすじ】

”七月七日１８：１８。桜坂の前で手を打ち鳴らすと、異界への道が開き……故人に出会うことができる”学校裏の桜坂には、そんな噂があった……。七月七日、冬樹はちょっと気になる同級生の美沙子に誘われ、桜坂を訪れるのだが……。

プロローグ：あの日

七月七日１８：１８、異界への扉は開かれる。

学校裏の桜坂には、そんな言い伝えがあった。

……

僕がその場所を訪れたのは、二年前のその日だった。

七月七日１８：１８、桜坂の麓で手を三回打ち鳴らすと……異界への道が開き、故人に出会う事ができる。

――――そんな噂、大多数の人間がそうである様に、僕も信じてなどいなかった――――――――

「あら、冬樹どこ行くの？こんな時間から」

母が優しく笑って疲れた声で言った。

「何言ってんの？今日塾でしょ」

僕も笑って返す。薄暗い玄関で、夕日がドアのすりガラスから滲み出している。靴紐を結びながら、そんなものをぼうっと眺めていると母の心配そうな声がした。

「でも、あんた……」

「いいの、行って来る」

冬樹っ、小さく呼ぶ母の声を振り切り、ドアを開けると潤んだ紅の日射しが冬樹の目を貫いた。

「わ、眩しっ」

空が真っ赤だ。

生い茂る草木も電信柱も、一面茜色に濡れている。

遠くに小さな鳥の影が見える。

鳴き声はしないから、鳥ではないのかもしれない。

ほんのり湿った風が流れると、不意に目元が潤んだので、常より大部軽いリュックを背負いなおす。

そっくりだ、あの日にそっくり……。

履き慣れたスニーカーでゆっくり歩く、アスファルトを踏み締める度に幸せな気持ちが滲み出してきそうになった。

……

「ねぇ、冬樹。付き合ってよ今日」

そう言った彼女の長い髪は、毛先が少し傷んでいた。僕が、”付き合う”という言葉に硬直しているのを見兼ねて、美沙子がもう一度声を掛ける。

「冬樹？一緒に行って欲しい所があるんだけど……」

「ああ……」

付き合うって、そういうイミ。

当時、僕は彼女が気になっていた。幼なじみとまではいかないものの、小中高……と同じクラスで過ごしてきたくらいの腐れ縁だ。大人しめの僕と……活発な美沙子、タイプは違えど共有した思い出は多い……はっきり言って期待していた。

けれど……彼女のことはよく思い出せない。

すらりと伸びる手足、淡い唇、きらきらしていた瞳は……強い光りを放っていて、僕にはとても直視する事が出来なかった。

何度も何度も彼女のことを思い出す……いろんな写真を引っ張り出してみたりもしたが、レンズ越しに笑った彼女はどれもこれも無機質で、あまりピンとこなかった。

何でもっと話さなかったのか……何でちゃんと彼女を見なかったのか……悔やむ資格は無い……わかってはいても、そんな後悔に苛まれ続けた。

ずっと一緒に居たのに……。

「桜坂の噂、信じてる？」

”七月七日１８：１８。桜坂の前で三回手を打ち鳴らすと異界への道が開き、故人に出会える。”

もちろん、そんな噂、当時の僕は信じていなかった。

学年で十本指には入る、インドア派の僕が信じていないのだ。まさかアウトドア派の美沙子が……？である。

「いんや？信じてないけど」

幾ら僕でも、そんなの信じてないよ……美沙子は僕にどんなイメージを抱いてるんだ……。

冬樹が苦笑しているのを見た美沙子が暗い声を出す。

「へぇ……意外」

「い、意外って何なわけっ？僕ってそういうの信じてそうに見えるの？」

美沙子の機嫌を崩してしまったことに慌てた冬樹だが、美沙子は残念そうに隣に座るだけだ。

すっとして柔らかそうな横顔が綺麗だった。

「信じてないか……だよねぇ……でも……じゃ、一人で……」

「どうしたの？」

うずうずしたので聴いてみると、唸りながらも美沙子が返してくれる。

「あのね、あたし今日、行ってみようと思うの」

「桜坂に？」

「うん、そう……。それで誰かに付いてきてもらおうと思ったんだけど……笑われそうで……」

なるほど？

「それで僕だったら信じてそうって思ったわけ？」

ははは、ごめん……と美沙子は笑った。

僕は怒気を含めた口調で文句を言いながらも、内心ガッツポーズを

きめていた。どんな理由にせよ、相談されたということは、信頼されているということなのだ。

「いいよ、ついてってやる」

ちゃっかりデートじゃん？という下心を持ちつつそう言うとホント？！と美沙子が叫んだ。

どうやら、あの噂を信じているらしい……そんなに誰に会いたいんだろう？

少しばかり胸を傷める冬樹に、追い討ちをかけるように美沙子の瞳に涙が溜まった。

「あのね、去年おじいちゃんが死んだでしょ？最後に会えなかったの、あたしだけでさ。だから一か八か！」

力のこもったその声に、あんま期待しない方がいいよと言ってみたものの、美沙子の瞳は本気だった。

高校一年生。

今年の夏はどこかに行こうかな……窓の外に目をやっていると、遠くで五限の始業ベルが鳴った。

【1】18：18に

桜坂は確かに、不思議な坂だった。

坂の入り口に、細かい花柄型の透かしのついた石灯籠が二つ。坂の両脇を桜の木々が並ぶだけで、坂の先には用途不明の……小さな広場が在るだけだった。

寺社や祠が祀られている訳でもなく、その先は地肌の剥けた山壁で、行き止まりになっている。

何のための坂なのか……図書館に行ってみても、思い当たる年寄りに聴いてみても、結局答えは見つからなかったが、春の間だけは、桜の名所として名高い。

１８：００。

「ねぇ、ホントだったらどうする？」

「え……それ期待して来たんでしょう？」

「いや……でもマジだったら怖いくない？」

「なんだそれ」

放課後、美沙子と冬樹は桜坂の下の方を登ったり降りたりしながら時間を潰していた。夕日から溶け出した茜色が、小柄な美沙子を鮮やかに浮かび上がらせている。それだけで僕は浮かれてしまう。

普段なら家に帰っている時間帯……美沙子なら、いつもはカラオケに行っている時間帯を、共に過ごせるのが、嬉しくて楽しくて堪らないのだ。

「え、どうしよ……やっぱ帰ろっか？」

時刻が迫るにつれて、美沙子がそわそわし出す。

可愛すぎる。

美沙子ともう少し一緒にいたい一心で、大丈夫だよ、と言った。何の根拠もありはしないが、美沙子はそれで落ち着いたようだった。

１００％何も起こらない。時間が近づくにつれて、冬樹にはそれが残念に思えてくる。

「何か起こんないかな……」

「ん？何」

「何でも？あ、あと一分」

「やばい～」

真っ赤に染まった石畳の中へ、僕達は降りたった。

緩く長く続く桜坂を見上げながら、二人で並んで石灯籠の間に立つ。

十、九、八、七、六、五、四、三、二、一……。

パンパンパン、……僕達はずれることなく手を叩いた。

辺りは変わらず静まりかえっている。

やっぱ、何も起こらないよな……。

冬樹は拍子抜けした時、桜坂がぐにゃりと歪んだ。

「げっ」

……災いは大抵、安堵した後に訪れる。

桜坂の両脇で、葉桜が大きく波立ったかと思うと、一気に膨らんだ……。

ゴオッと何かが迫って来る様な、不気味に風の固まる音がした……。

奥だ、坂の上から何か来る……！

目を閉じる暇もなかった。

坂の上に現れた……墨汁でできた様な雲の塊が、爆発したかと思うと勢いよく滑り降りてくる。

僕は目を見開いて硬直する……美沙子のことなど忘れてしまっていた。

来る！黒い……風？

黒い風が吹き抜ける……色彩の嵐に目を覆いたくなる。それは映像の嵐だった。

どんな映像だったかは忘れてしまって思い出せない。

……

大量の冷や汗でワイシャツがびしょ濡れだ。

気が付くと夜になっていた。なぜか石灯籠にはオレンジの炎が宿っていて、美沙子は隣で倒れていた。

「あ……おい美沙子！」

爪の跡のついてしまった手のひらをほどいて美沙子に駆け寄ると、先程より色の白くなった美沙子がぼんやり瞳を開けた。

「大丈夫？」

「うん、でもさっきの……」

「うん……」

美沙子も同じ体験をしたらしい……ということは本当に、何かは起こってしまったらしい。

「……もう夜だから、送ってくよ？」

しかし、気を取り直して振り返った冬樹は固まった。

足元からポロポロと石の欠片が落ちていき、暗がりの底で水の跳ねる音がする。絶え間なく水音がするということは……下には川でも流れているらしい。

「入り口が……無いね……」

石畳のあった場所は得体のしれない暗闇になっていた。

冬樹が切り立った崖の上から、出口のなくなったことを伝えようとすると、美沙子の放心した声が聞こえた。

「桜だ……」

「桜？」

振り返ると途端に視界が明るくなる。淡い桜の花が煙るように咲き誇っていた。

「嘘、今何月だっけ」

と、いうより……さっきは葉桜だった。

口元がひくつく。

「七月」

冬樹とは対照的に美沙子は落ち着き払っていた。

「本当だったんだね」

狼狽えている冬樹を置いて、美沙子は歩き始める。ふわふわ坂の向こうへ誘う桜は、暗闇を照らすぼんぼりみたいだった。

花びらが舞散る度に、光がほどけた様になって、美沙子や冬樹の間を抜けていく。

「ついてきて……くれる、かな？」

顔を前に向けたままで美沙子が言った。

僕は混乱していた。理解不能だ……先に何があるのかなんて気味が悪くて、知りたくもない。

けれど美沙子はちっとも動じていない。

「こ、怖くないの？もう帰ろうよ」

「怖くないよ、綺麗じゃん。それにね、帰れないでしょ？もしかしたら、この先に出口あるかもだし……おじいちゃんにも会えるかもだし……」

「ああ、そう……だね」

落ち着き払ったつもりだが声が掠れてしまった。

「冬樹、ここに居ていいよ。出口あったら、呼びに来るし」

「え？」

「こうなったのは、あたしが誘っちゃったせいだもんね」

歌う様な美沙子だが、肩が震えていた。

僕は仮にも男なのに……美沙子より、背も高くて力もあるのに……
……美沙子に守られてどうする。

そう思うと、恐怖よりも恥ずかしさの方が勝った。

「僕も行くよ」

「そう？良かったっ」

振り向いた美沙子は、実はちょっとあたしも怖いの、とバツ悪そうに笑った。

【2】桜坂にて

僕達は、時折舞い落ちる花弁を目で追いながら、坂を登った。

往復で十分とかからない坂道を二十分も三十分もかけて登った……

といっても定かでは無い。

時計は依然として、１８：１８を示していた。

……ポン……ポン…。

小気味良い小鼓の音が聞こえ始めた所で、僕達は足を止めた。見れば、何も無いはずの広場の方に、篝火(かがりび)が焚かれていて……木造の建物の様な物がある。

「あれ、何？」

美沙子の問に、首を振るくらいしか出来ない。さっきまで忘れていた得体の知れないモノへの恐怖が、沸々と湧いてきた。

美沙子が足を踏み出す。

「だ……め」

僕は堪らず、美沙子のブレザーの裾を掴んだ。手が小刻みに震えてしまって……止めようにも止まらない。

情けない……情けない。

顔から火が出そうなくらい、恥ずかしくてどうしようもない。けれど僕は怖くてしようがなかった。……それに、奇妙に確信めいたものがあった……行ってしまえば無事では済まない、あそこは聖域なのだ……、と。

「ごめん、あたしのせいで」

男のクセに！……そう叱咤されるかと思ったのに、彼女はとても優しく、済まなそうにそう言った。

ポンポン……ポン……と小鼓の音が美沙子を誘う。美沙子は、大丈夫、と囁くと冬樹を置いて篝火の方へ……足を進める。

「行くよ！僕もっ」

置いて行かれるのが嫌で、思わず抱きついてしまった……案の定、鉄槌をくらう。

「バカ」

「悪い……」

そうして僕達は歩きだす。

小鼓の丸い音、篝火の木が……炭に変わる音、何か……弦を弾いて流れる音楽、笛の音というには余りに甲高く……そして柔らかな音色……。

僕達は、そっとそこへ近付いた。様々な音が響いているにも拘わらず、そこは余りにも静かだった。足音に気をつけても、息を潜めても、気付かれてしまうんじゃないかと……ハラハラするぐらいにシンとしている。

「あ」

篝火の側まで行くと、沢山の人間が居るのが見えた。

……着物に袴に振り袖に貫頭衣……平安時代、飛鳥時代……あとは……？……。

様々な時代の衣服を纏った人々が、一本の大きな桜を前に……人垣を作っている。皆一様に蒼白い顔をしていて、明らかに生きた人間ではない。

「どうする……？何か……ヤバそうだよ」

「そうね……」

今度こそは美沙子もお手上げのようだ。

僕の目の前が真っ暗になりかけた時、ふんわり清々しい香りが緩やかに鼻孔をくすぐった。途端に人垣で歓声が沸き起こる。

ふわり、ふわり……桜にしては紅みの強いその木の上から、何者かが降りて来る。長い白銀の髪を後ろに束ね、白い着物に…きらびやかな着物を、四方八方に引き裂いたものを羽織っている。右手には鈴の付いた柄杓……左手には揺らめく薄蒼の提灯……そして、厳めしくも流麗な鬼の面を着けていた。

しゃるりん……しゃるりん……。

地面に舞い降りたそれは、柔らかな足取りでキレのある動きをする。その鈴が鳴る度に、空気が張りつめて澄んでいくのが足先から感じられた。

「姫様我らも舞いまする」

真っ白頭の年老いた男が、低く押し込めた声でいうと……二、三人で立あがる。

その手元の先で何かが光る……よく見てみれば、氷を研いだみたいに透明な刀、だった。

ヤバい……。

そう思った矢先だった。

「おじいちゃん！！」

美沙子が我を忘れて飛び込んだ。

「美沙子っ！」

冬樹も思わず声をあげてしまった。

その瞬間にピタリと音が止む。

「美沙子……何故……」

どうやら白髪の老人が美沙子のおじいさんだったらしい。だが、喜びに涙する美沙子とは違い、おじいさんの目は見る間にきつくなった。顔色はどんどん悪くなる。

「男女のつがい」

厳しい……冬の清流のような声だった。

しゃるりん、……声主が柄杓を振ると美沙子のおじいさんは、苦し気に息を漏らす。

「弁解の余地もございませぬ」

「良い覚悟じゃ」

先程『姫』と呼ばれていたモノは、さも愉しげに笑った。ひんやり肩の辺りから冷たくなってくる。

怖い……。

「あ……、おじいちゃん？あ、あたし達ね、来たはイイんだけど帰れなくなっちゃって……その……」

美沙子も嫌な気配を感じたのか、徐々に後ずさる。

「それは……お前の恋人かい？」

おじいさんが表情を堅くしたまま美沙子に聞いた。

「そんな……、恋人じゃないよ……？」

美沙子が青ざめながら呟く……僕は少しだけ傷ついたが、そんなことを言っている場合ではない。

「姫様……」

「じしい、貴様のような神楽男風情が……この私に物申すとは」

「畏れ多いことと心得ています。しかし……これは私の孫なのです」

おじいさんの懇願は、虚しくも、姫を笑わせるだけだった。

「知ったことか……男女の仲は、裂かねばならぬ。孫がどうした？貴様も最早……こちら側のはず」

そう言うと、鬼面の姫はくくく、と喉を鳴らした。姫、という呼称からすれば女だが声音を聞くと、よくわからなくなる。

「おじいちゃん……？」

流石に美沙子の声も、震えていた。

「私はもう……こちら側なんだ……」

おじいさんは寂し気に笑って、姫の後ろに退いてしまう。

僕達は……どうなるんだ？仲を裂くって……。

「あの……」

しゃん……。

冬樹が口を開くのを鈴の音が制す。

「質問は許さぬ、お前達はただ選べばよい」

美沙子が苛立ちを溜め息に替えると、姫は再びくくくと笑った。

「まずは、この水を」

姫が柄杓で夜空を掬う。そうして目の前に出された柄杓には、清らかな水が揺らめいていた。

「嘘……」

冬樹と美沙子は、不安を露(あらわ)に顔を見合わせる。

ヤバい……どうしよう。毒、だったりして……。

「早う」

厳しい声に促され……仕方なく柄杓を受け取る。

怖い……ぜってぇ普通の水じゃねぇもん。

「飲まぬのなら……この場で裂いてやってもいいのだが？」

姫が急に長く伸びた爪を、ひらひらさせる。

「しゃあねぇ……」

僕は勢いよくその水を口に含んだ。途端に体中が澄み渡った気がした。

「美味しい……」

そう、その水は美味しかった……不自然な程に。

冬樹の反応に安心した美沙子が反対側から飲み始める。

それを見て、少しばかり頬を熱くした冬樹だが……突然、ある神話を思い出した。

大地の女神の娘が黄泉に誘拐されて……黄泉の食べ物を口にしたがために……帰れなくなる。

まさか……ね？

「さあ、これで……もう帰れまい」

「は？」

「え？」

姫、が柄杓を奪ってしゃんと鳴らす。

「元の国へ帰れるのは一人、もう一人はここに残って貰おう」

「何言って……！」

詰め寄る美沙子の首筋に、おじいさんが刀の切っ先を当てる。

「おじいちゃん？どうして？！……あたしを殺すつもり！？」

「それ以上近寄れば……そうなるかも知れんな」

「おじいちゃんっ……」

「駄目なんだ……私はもう人ではない。人の持つ情けも……忘れつつある」

おじいさんは氷った表情を崩さず、きりりとした目で僕を貫く。

その目は僕に……”僕に”、残れと言っている気がした。……いや確実に……そう言っていた。

そして僕もそうするべきだったのだ。
男なら……いいや……もし本当に彼女が好きだったのなら……そうすべきだった……そう出来たはずだ……けれど僕は……。……少しばかり勉強が出来た、少しばかり金持ちだった、行きたい大学があった……美沙子よりも自分の未来の方が、ずっとずっと大事で……何よりそこに残るのが、怖くて仕方なかった。

それは美沙子も同じだった筈だ……それなのに……。

「さあ選べ！一人だけじゃ。男か？女か！話し合うか、争い合うか！！早い者勝ちじゃ！」

「そんなの決められる訳ないでしょう？！」

調子外れに叫ぶ姫に、美沙子が食って掛かる。

「一人だけじゃ！この水を含んだのだから。帰ろうとしても無駄よ、一人だけしか通さぬからのう……それとも二人……仲良く死ぬかい？」

死……ぬ？

怖い怖い怖い怖い怖い怖い……。

「そんな！」

美沙子が叫ぶと同時に、僕は出口へと走り出した。

桜の花びらが額に張り付いても、美沙子の必死に僕を呼ぶ声を聞いても、もう僕は振り返らなかった。

十分で往復できる坂道を、五分で走り抜ける……妖しく浮かび上がる石灯籠の先では、空が責め立てるように真っ赤に染まっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6203e/

界

2011年10月4日13時47分発行